2023 年度　　製鉄記念八幡看護専門学校

自己点検・自己評価　まとめ

2023年度は新・旧カリキュラムの学生の混在の最終年となった。2022年度生は2年次、新たに導入となった「情報管理」、「地域在宅看護論Ⅰ」、「看護の視点で病気をみるⅡ」を履修した。5月より新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い学校全体として教育活動を拡大することができた。

学校評価については、2023年度も学生による授業評価、実習評価を学年ごと行い、看護師等養成所の自己点検・自己評価指針に基づき、教員全員による自己点検・自己評価を行った。2021年度からは法人の第三者評価委員会を通して、また、ホームページを通して外部への公表を行っている。

Ⅰ．教育理念・教育目的（評価平均2.8）

教育理念は3年課程開始のS33年（1958年）より同じ理念のもと看護教育を行っている。教育目的については、現代社会のめまぐるしい動きの中で多様な価値観をもつ人々を対象とすることから看護師に求められる倫理観の育成について新しく加えた。今年度も評価平均は2.8と高いことから教員間での共有はでき、学生への浸透もできていると考える。

Ⅱ．教育目標（評価平均2.8）

2022年度のカリキュラム改正においては改正の主旨を盛り込み､新しく教育目標を全教員で検討したことから、全体の評価平均は2.8と高く、教員の理解、共有ができ適切であると言える。今後も教育目標と連動した教育活動を行っていく。卒業時の到達レベルとして期待する卒業生の特性を学生便覧に明示している。

卒業時看護実践力の到達状況	2023年度卒業生　64回生実習まとめ参照
国家試験合格状況	2023年度卒業生　64回生　97%　学校パフレット掲載

Ⅲ．教育課程経営（評価平均2.4）

「新カリキュラムの基本的な考え方」「各分野の考え方および科目の設定理由」を作成し、教員間での共有と新人教員にはオリエンテーションで提示し説明を行うようにしている。科目・単元構成の項では評価平均：2.8であり、評価基準に則った実践ができている。教育課程評価の体系については今年度評価平均：2.6と昨年より上昇（2.1→2.6）、個々の学生の単位認定について会議等で協議する機会も多く、教員間で理解、共有することができているためと考える。

教員の教育･研究活動の充実については、評価平均1.9で今年度も低い結果である。各教員の授業時間（平均78.7時間/年）、実習時間数（平均28週/年）は年間計画の中で表示している。教員の異動や退職により授業配分や担当領域が変更する場合もあるが、大きな講義担当科目の変更がないようにしている。授業準備の時間の確保は各教員によって生活背景も異なり一定の基準は設けていない。教員個々のスケジュールの中で準備を行うが、業務の過密さによって時間外労働時間での対応とする場合もある。近年、働き方改革によりタスクシフトも推進され、事務業務の教務事務への移行や業務整理を行うよう取り組んでいるが、十分ではない。さらに教育DXへの取り組みも強化することで授業の準備時間を確保できるよう努めていく。

教員の自己研鑽としては各専門領域、教育関係の学会、研修など各教員1回/年の出張を推奨している。教員は各自年間5万円図書費があり講義実習、専門領域の図書購入を行っている。自己の専門領域に重点を置く他、看護基礎教育の動向を捉え、今私達教員に求められている事柄をタイムリーに実践していくようアンテナを張り取り組んでいかねばならない。2023年度も研修会、学会はハイブリッド開催との併用が多く、受講の機会は拡大されている。今後も積極的に受講し、研鑽を積んでいく必要がある。教育者として教員のレベルアップを図るためにも教員の大学編入、大学院進学を推奨している。また、中堅教員以上は組織における管理的視点を養うために看護管理者教育課程ファーストレベルの受講を推奨している。

学生の看護実践体験の保障については、評価平均2.6であった。新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、2023年度はほぼ制限のない状態で学生は3年次実習を行え、充実した学びを得ることができた。主な実習施設である製鉄記念八幡病院看護部が毎月、臨地実習指導者会議を開催している。その中で臨地実習指導者と教員が情報共有を行い、協力体制を強化している。コロナ禍で4年間中止

していた臨地実習指導者講習会も開催し、臨地実習指導者の意欲向上、役割意識の向上に努めた。さらに、変化する学生達を理解し、適切な指導が行えるよう継続した臨地実習指導者講習会の開催に参画していく。臨地実習における学生のインシデントはその都度、教員間で共有し、学生への指導を行うとともに各実習のまとまりごとに集計し、実習施設とも共有している。

Ⅳ．教授･学習･評価過程（評価平均 2.4）

今年度も全授業科目に対して授業評価を行った。集計した評価結果は学内に 1 週間掲示している。学外講師に対しては、必要時口頭での報告を行い、学内教員は自己の評価結果をもとに授業改善を行っている。単位認定に関する評価に関しては評価平均：2.7 と高めであったが、学生及び教育活動における評価について評価平均：2.0 と低値であった。行事ごとにアンケートはとっているが、講義・実習以外での学生自身の評価や教育活動を多面的に評価し、整理する体制も検討が必要である。授業の展開過程に関して全体的に評価は高いが、学生の学びの質を向上するための授業方法の工夫は十分ではないと考える。シミュレーション教育、PBL、反転授業等科目に応じた授業方法を工夫していかなければならない。

Ⅴ．経営･管理過程（評価平均 2.1）

経営・管理過程に関する評価は全体的に他の項よりも評価が低く、学校組織および運営に関する教員の理解が図れていない結果となっている。特に財政的な基盤に関しては管理者の把握に止まっているが、教職員でも理解しておくべき事柄を整理し、共有していく必要がある。

学校施設については老朽化が進む中、部分的な修復で対応し、学習環境の整備に取り組んでいる。法人の製鉄記念八幡病院の管理棟の建て替えが予定されており、今時点での大々的な学習環境の改善は行えないが、学生層の変化に合わせた施設設備の整備・改善に関しては、2025 年度より男子学生の募集を開始するため男子更衣室の改修工事の承認を得た。その他、学校施設のセキュリティも課題である。

学生への支援として､アドバイザー制により学生個々の状況に応じた教育支援体制を強化している。年々学生の背景、家庭環境、経済状況、価値観の多様化、心身の健康面、など複雑になり対応が困難な学生も増えているが、教職員で共有し学生本人の納得いく方向性を支援している。中には教員のみで対応が難しいケースもあり、スクールカウンセラーの活用や法人の臨床心理士からの支援を受け、学生及び保護者対応している。3 年次は特に学習面に力を入れ、アドバイザーの学習支援の他、進路･国試担当の教員は年間計画で学力下位の学生の学習支援を強化している。毎年高い合格率を維持できていることからこの取り組みは評価できる。

経済的な支援では、学生支援機構の奨学金に加え、2022 年度ほり高等教育の就学支援新制度の認可を受け、運用を始めた。法人の奨学金制度も 2024 年度からは貸与額を充実させ半数以上の学生が活用している。

自己点検・自己評価体制については昨年度より全教員へ看護学校における自己点検・自己評価の意義と目的について説明を行い、全員で評価を行っている。評価結果をもとに評価平均値が 2.0 未満の項目に関してはフィードバックを行った。全教員における自己点検・自己評価を継続する中で今後は各評価項目ごとさらに振り返りを行い、改善に向けて取り組んでいく。

Ⅵ．入学（評価平均 2.5）

入学試験では推薦入試（指定校）、社会人入試、一般前期試験、一般後期試験（H28 年度～）を行ってきた。受験生の減少が著しい中、看護系大学の増設、近郊の看護学校との競合により入学生が定員を満たせていない。（定員 40 名中入学生 36 名）次年度に向けては、男子学生の募集および公募推薦制度を導入し、受験生確保を行っていく。募集活動として、広報担当教員を中心にホームページ、入学案内の作成、学校説明会の企画を行ってきた。高校訪問については副学校長が近郊の推薦指定校へ訪問している。進路指導教諭との面談では学校のみならず母体の製鉄記念八幡病院への信頼も厚く、その点で一定数の推薦をいただけていると感じている。今後は推薦指定校以外の高校へも訪問し、近県の高校まで広く広報を行っていく予定である。

Ⅶ. 卒業･就職･進学（評価平均 2.6）

助産師進学者は、2023 年度　1 名　　大学編入者はなし
2023 年度　64 回生　就職状況　　卒業生 34 名（うち 1 名国家試験不合格）
　製鉄記念八幡病院　　23 名
　他　外部就職　　9 名
　助産師進学　　1 名
卒業生 23 名が製鉄記念八幡病院に就職し、看護部との情報交換を行い新人教育のサポートを行っている。他施設へ就職した卒業生の状況把握は十分行えていない。学校としては、相談窓口としていつでも卒業生が来校できるようにしているが、ホームカミングデイ等の企画により卒業生の動向も把握していく必要がある。卒業後の進学、資格取得、大学編入、大学院入学支援は実施している。

Ⅷ. 地域社会／国際交流（評価平均 2.0）

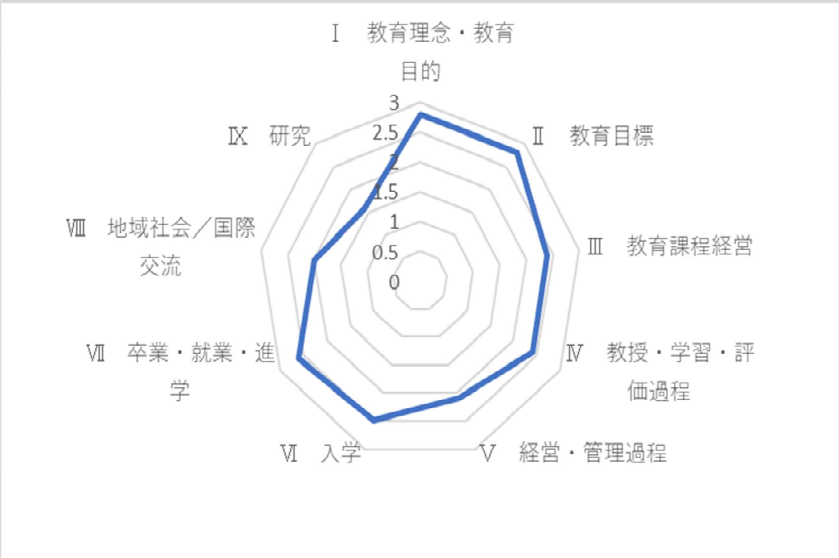
新型コロナウイルス感染症も 5 類移行となり教育活動を拡大することができた。今年度は「地域貢献の日」として年間のカリキュラムに組み込み、法人が行う地域活動にもボランティアとして学生の参加を呼びかけ、学生と教員がともに参加したことから地域活動として定着しつつある。さらに学生の力を引き出し、学生主体の活動にまで発展させていけるよう地域の諸資源を活用した取り組みを検討していく必要がある。

また、国際交流については教育研修で JICA の研修（2 年に 1 回）を行っているが、さらに発展させた取り組みには至っていない。国際的視野を広げるための授業科目は設定していないが、看護学概論の授業の中で異文化における看護、看護における国際協力等の内容を取り込みよりグローバルな視点で学ばせることも必要である。卒後、海外において看護職に就くことを希望する学生への支援体制も検討する。

Ⅸ. 研究（評価平均 1.6）

2023 年度も学校として研究活動には取り組めず、学会での発表や雑誌への投稿には至っていない。しかしながら、2023 年度は福岡県看護協会 10 地区支部看護の取り組み発表会において 1 例実践報告を行った。参加者はほとんどが病院勤務者であり、看護学校の教育実践を広く知ってもらう機会となった。年間業務目標の中で、教員個々の教育実践報告を目標に掲げ取り組んでいけるようにしたい。

2023 年度　看護師等養成所の自己点検・自己評価指針に基づく評価



Ⅰ	教育理念	2.8
Ⅱ	教育目標	2.8
Ⅲ	教育課程経営	2.4
Ⅳ	教授・評価過程	2.4
Ⅴ	経営・管理過程	2.1
Ⅵ	入学	2.5
Ⅶ	卒業・就業・進学	2.6
Ⅷ	地域社会・国際交流	2.0
Ⅸ	研究	1.6

メジカルフレンド社　看護教育自己評価指針参照（3 段階評価平均　当てはまる：3　やや当てはまる：2　当てはまらない：1）